

「何やて、われ。人の通り道を邪魔しくさって、ドタマ
からわったるか」

「何を言ってるんだ」

隆夫の剣幕に小谷は目をみはりました。
「何が何やめかすねん。監督面して威張ってたら大間違
いやぞ。われっろ、親方や親父にいらんこと言いつけよ
ったんは——」

「何のことだ。ちっとも判んないぞ」

余りの雑言に小原の顔も変りました。隆夫は小原にな
ぐりかかろうとします。

そんなことをされては大変です。あわてて止めに入り
ました。

「隆夫やめろ」

その声でふり向いた隆夫が、すっと身をかがめると測
量杭をひろい、ふりかぶって私になぐりかかります。

飛び下って身をさけました。隆夫は歯を向き出し、狂
人のような凶暴な目で私をにらみつけ、何やらわけの判
らない叫び声をあげながら、第二撃、第三撃と打ちこみ
ます。

隙をみて私は、ふり下す測量杭の下に飛び込み、隆夫
の腰に抱きつきました。両手で相手の身体を引きつけて、
サバおりをかけました。

隆夫は崩れるように地面に座りこんでしまいました。
測量杭をもぎとって投げ出した所へ、平山親父が飛ん
で来ました。

「お前のアホは尻がないわい」

平山が隆夫を引き立てて行く後姿を見ながら、思わず
ため息をつきました。

（もう隆夫は多田においとけいな。当分明田にブルを
かしてもらおうか）

そり思ったとき、私の頭の中をまるで別な言葉が走り
ぬけました。

（小切手だ）

昨日、松本親方が国土開発で受取った取下手金で
なかつたら、親方の不可解な行動の意味がすべて判りま
す。

小切手は銀行へ持って行かなければ現金になりません。
昨日は土曜で銀行は正午までです。松本親方は午前中に
あわてて帰りました。

しかし、銀行の閉店前に合わかたつたのでしょう。
とすれば次に銀行が開く月曜まで給料も延びることにな
ります。

（そりだつたのか）

今まで松本親方のやり方に不満だった私も納得した気

持ちになりました。勿論、私が勝手に推察しただけで、
誰にたしかめたわけではありません。

しかし、この想像が間違っていないだろうという確信
がありました。

ただし、それを私は誰にも言いませんでした。今更、
そんなことを言っても、何のたぐさめにもならないと思
ったのです。

それよりも、親方が誰かにその事情を一言耳うちして
くれれば、みんなの不満も或る程度少くてすんだのでは
ないでしょうか。

だが、松本親方は妙に気位が高いから
「何でオレが一々若い衆にそんな言いつけをせんらうん
のや」

と語りでしょう。それはそれでもっともなことかも知
れませんが。

二十一日。月曜日にになりました。一日の仕事が無事に
終り、飯場へもどって皆食事をすませました。

こんな夜は入浴者が少いのです。早く金をもらって遊
びに行きたいので、風呂に入る時間も惜しいのです。

十一月の日は早くくれるので、あつという間に外は暗
くなります。親方はなかなか来ません。

「電話かけてみいや」

平山が奇々して言います。夜道を煙草屋まで行ってダ
イヤルを抽します。夜風が足元を冷い舌でなめて行きま
す。

「今から出るところや」

松本親方の声が珍しく撥帳がいいのです。いつもは電
話でもぶつきらぼりな人です。

「それはそうと、明日から三日ほど有馬のコンクリヤ、
忙しいぞ」

親方、張り切ってるな、と思います。しかし有馬のコ
ンクリヤということは、と覚えるひまもなく

「すぐ行くから」

二言三言と思つて電話は向うから切れました。

それから一時間半ほどして松本親方が来ると、パタバ
タと忙しい思いをしました。

給料の支払いがすんだときはもう九時半になっていま
した。

電話のときに私が思つた通り、松本親方は有馬のコン
クリヤを五人ほど連れて帰りました。さうして
やつと給料が出て、明日は休みと思つたとなんに連れ
て行かれるのですから、指名された者こそ災難ですが、
池田などはむしろ喜んでるよりも見えませんでした。
たとえ不満に思つていても、そこは親方の真意で、

グッとも言わせません。

隆夫もその一人に指名されて、これはもうふくれっ面ですが叔父であり、親方である人の命令では、文句は言えません。

隆夫はそのまま多田へはもどらず、尼崎で働くことになりました。

いろいろ噂が耳に入っていることでしょうから、松本親方は自分のひざ元において、監督するつもりなのでしよう。

酒乱癖はあっても、秀才伝説を背にしていた父親の、いい所は少しも似ない息子なのです。

そんな隆夫を見るにつけ、平山姐御は息子の敏夫のことが心配になったようです。

誰から聞いたのか、隆夫の時計の一件も知っていて、さればこそ気が気でないのです。

翌朝早く私は姐御に叩き起されました。

「日野さん。尼崎へ行くさかい、一詣について来たって」
まだ六時というのに、あわてて飯をかつこんで着替える

と

「コート着て行った方がええやろか」

「この寒さだから着た方がいいでしょう」

突如、寒い朝でした。

雪かと思つたほどのきびしい霜が降りて、水道も凍っていました。

おりから、今にも泣き出しそうな黒い雲が、ずっしりと空を覆っています。

「でも、まだ十一月だからねえ。オーバーなんか着たら笑われへんやろか」

「十一月でも十二月でも、寒ければオーバーを着るし、あたたかければ脱ぐ。それでいいんじゃないですか」

「そりやろか」

「そりですよ。ホラ、言ってるうちに白いものが降ってきた」

ようやく決心がついて、鴛色のスーツに同じ色のオーバー、それにハイヒールという姿で現場を出ました。

で、多田大橋の近くまで来ると、姐御の足が止まりました。

「どりしたんです、姐さん。もうバスが来ますよ」

「ほらあの人、コートなんか来てへん」

姐御があごをしゃくる方を見ると、若い娘さんがバスを待っていました、それがオーバーなしのスーツなのです。

「やっぱり恥かいたらあかん」

姐御はさっさと現場にもどります。

それからすぐ出かけるのかと思つたら、テレビの前にベタリとすわりこんで、「おはなはん」を見ているのです。

姐御が和服に着替えて出かける用意が出来たときには、もう九時になっていました。

もともと七時半のバスに乗るつもりで早急きしたので、うんざりです。

こんなことが、まだまだ続くのだろうか。

私の人生だけがこんなのだろうか。

と、雪空の下でバスを待ちながら、やり切れなさがつのるのでした。

